慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	〔コメント二〕 ベルリンの地下壕 : 特に総統地下壕を中心に
Sub Title	The Füehre's bunker in Berlin : its history of disposal and present condition
Author	神田, 順司(Kanda, Junji)
Publisher	三田史学会
Publication year	2011
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.80, No.2・3 (2011. 6) ,p.96(194)- 103(201)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム : キャンパスのなかの戦争遺跡 : 研究・教育資源としての日吉台地下壕
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20110600-0096

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔コメント二〕
ベルリンの地下壕―特に総統地下壕を中心に―

神田順司

ドイツ・ファシズムの加害の歴史を刻む遺跡としては、現在ではポーランドなど外国に属するものも含め、アウシュヴッツやダッハオあるいはハンブルクのノイエンガメなどの強制収容所が知られています。これらは今日に至るまでナチス犯罪の現場として保存され、歴史教育にいろいろ役立てられてきましたし、また観光ツアーの対象にもなっております。こうした遺跡の保存や戦争の記念碑の建設などは、とりわけ統一ドイツになりましてからも、過去と向き合う必要から、一層真剣に行われるようになりました。有名なものとしてはベルリンのホロコーストの記念碑や記念館がありますが、これなどはまさにベルリンの中心街に作られたわけで、日本ではおそらく考えられないことだと言えるでしょう。

こうした違いから、わが国では、あたかもドイツが日本と違って一貫して過去の不正に対して積極的に立ち向かい、その克服への取り組みが戦後間もなく始められたかのような通念が支配的でありますが、必ずしもそうではなく、そのプロセスは複雑で、ドイツの戦後の政治的あるいは経済的状況、東西の分断、冷戦構造などが、過去の不正に対する責任の取り方あるいは戦争遺跡等の保存等に関して、強く影響を及ぼしてきました。

特に西側は、戦後のアデナウアー政権下では経済復興を先決問題としましたから、「過去の克服」に関しては積極的ではありませんでした。その後、一九七〇年の有名なポーランドにおけるユダヤ人・ゲットー犠牲者慰霊碑の前でのブラントの謝罪などは、国際的には高く評価されましたが、当時の西ドイツの中では議論が大きく分かれるという状態でした。しかし、これを契機として西

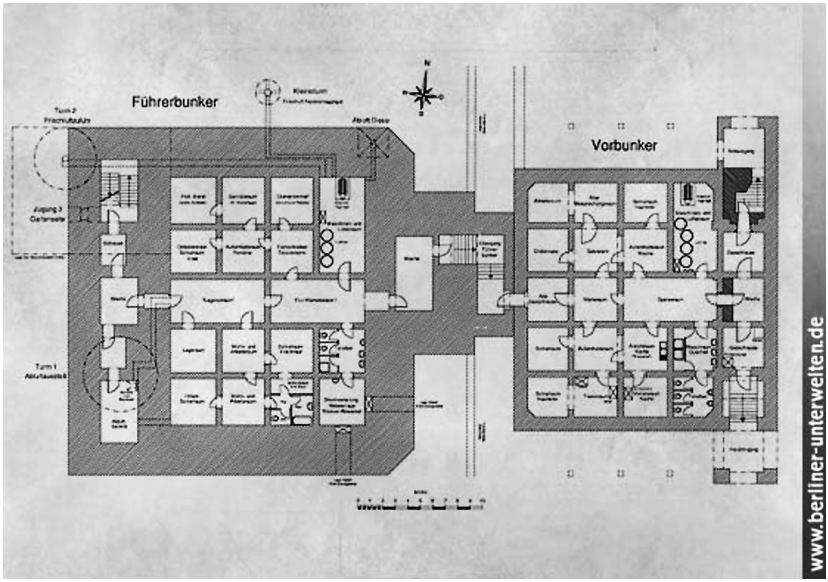
ドイツでは過去と正面切って向き合うという傾向が段々と強くなってゆきます。

他方、東側は、ソヴィエトに対する賠償の負担もあり、経済的にも非常に困難な状況から出発します。ソヴィエトの支配下にあった東ドイツでは、戦争の歴史は反ファシズム闘争と結びつけられ、マルクス・レーニン主義を賛美するような一面的な現代史が書かれてきました。たしかに東独は、西独アデナウアー時代の不十分な過去との取り組みの結果、政治的経済的要職に復帰した旧ナチ党員の過去を暴くというキャンペーンを通して西独における過去の克服を促進した面もありますが、過去の歴史にかかわる戦争遺跡の保存に関しては必ずしも熱心だったわけではないようです。

その背後には東西冷戦の強い影響がありました。例えば今日紹介するベルリンの地下壕、特に総統地下壕もほとんど放置状態が続きました。しかしドイツ統一後、戦争遺跡の保存に関心が高まってきます。それと言うのも、これまでのご報告の中にありましたように、直接的な戦争体験を持つ方々が徐々に亡くなるに伴い、戦争遺跡そのものが重要な意味を持つようになり、保存に強い関心が示されると同時に、統一ドイツになったこともあって、調査もしやすくなったということもその一因だろうと思われます。

今日紹介致します総統地下壕の情報に関しても、一九九七年に歴史家やジャーナリスト、あるいは一般市民等が集まってつくられた「社団法人ベルリン地下世界(Berliner Unterwelten e. V.)」という団体による調査の成果のひとつであります。もちろんデータとしてお見せする写真等は、戦中または戦後間もなく撮られたもの、あるいはその後の地下壕の処理に関して撮られたものです。それをこれから、配布した簡単な年譜に沿って、ご説明したいと思います。

先ず、これは直接地下壕とは関係ないのですけれども、ヒトラーの官邸の一部が空襲によって破壊された後、ヒトラーとその側近がその現場を見ているところであります（写真省略）。次にお見せするのが、ヒトラーの総統地下壕の図面です（第1図参照）。図面の左側が総統地下壕（Führerbunker）です。そして右側の壕が、総統地下壕が作られる以前、官邸の迎賓館改修時に、その地下に作られた比較的簡易な地下壕（Vorbunker）であります。一九三五年、三六年に作られたこの地下壕は、覆いのコンクリートの厚さが一・六メートル、壁の厚さが



第１図　総統地下壕平面図　©Dietmar Arnold/Berliner Unterwelten e. V.

一・二メートルの規模で、建築費が二五万ライヒスマルクです。一九四三年の一月にナチス・ドイツはベルリンの制空権を失います。それに伴って官邸の庭にさらに頑丈な地下壕を作ることになります。これが総統地下壕と呼ばれるもので、覆いのコンクリートの厚さが三・五メートル、壁の厚さが三・五から四メートル、また深さは場所によって違いますが、全体が地表から一〇メートル位の深さに作ってあります。この地下壕は壁が非常に厚いものですから、内部の広さは限られ、一五×二〇×三メートルという状況で、中は細かな小部屋に分かれております。この総統地下壕の総建築費は一三五万ライヒスマルクですから、以前作られた官邸地下壕よりずっと高額なものになっています。

　この地下壕の上部はさらに一メートルの厚さのコンクリートで覆われ、吸気塔と排気塔がそれぞれ一基ずつ設置されます。官邸とともにこの総統地下壕を、終戦直後に地上から撮影した写真がこれです（写真１参照）。写真中央に見える三角形の屋根の建造物が排気塔で、その背後にある四角いコンクリートの建造物が庭への出口で、非常口になります。写真では樹木の陰で見え難くなっていますが、剥き出しになった鉄筋があるのが見えますか。

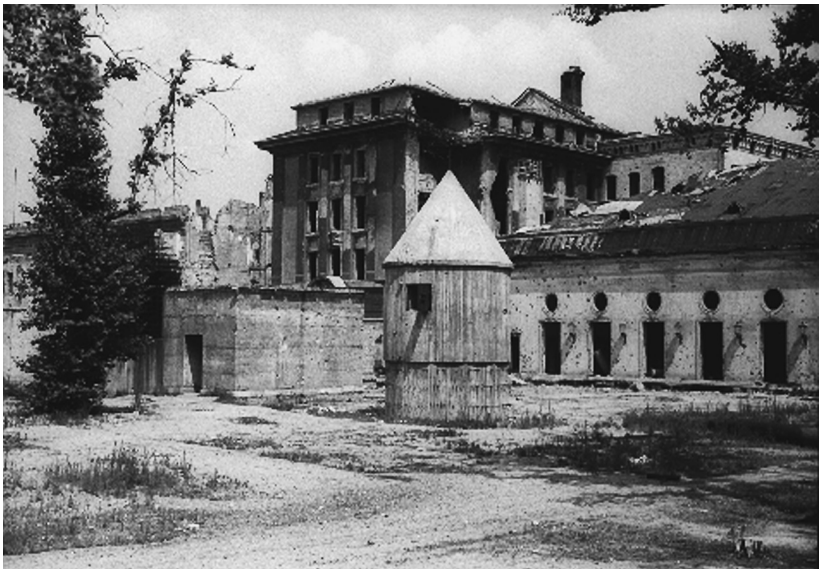


写真１　©Bundesarchiv, Bild 183-V04744.

これが破壊された吸気塔の姿です。一九四五年の三月にここの庭でヒトラーが、ソヴィエトの戦車隊と戦ったヒトラー・ユーゲントらに鉄十字勲章を授与しますけれども、これがヒトラーの最後の公式行事でした。

一九四五年四月二九日にヒトラーはこの地下壕で、愛人のエーファ・ブラウンと結婚式を挙げまして、翌日の三〇日にヒトラーはこの地下壕内でピストルにより自殺、エーファ・ブラウンは服毒自殺をします。それに続きゲッペルスも自殺をします。ヒトラーらの死体はこの地下壕から出たところで焼却されることになります。

この地下壕に関しましては、戦後の一九四七年の一二月にソヴィエト軍の工兵隊がこれを爆破します。先ほど見ましたように非常に頑丈なものですので、そう簡単に壊れません。中の隔壁は破壊できたものの、上部の三・五メートルのコンクリートの覆いは結局爆風で四〇センチずれただけでした。次の写真は東独の統治下でこの地下壕が破壊された様子です（写真省略）。これは先程見た吸気塔ですね。それが破壊によって傾いた様子です。三角の屋根でわかると思います。これらの建造物が非常に頑丈であるということがここからも分かります。

東独政府は一九五九年の夏に再度この地下壕の爆破を

写真２　©Berliner Unterwelten e. V.

試みます。何度も爆破を試みますが、頑丈なためなかなか破壊できず、かなりの努力をして壊していくことになります。こうして内部が見えるところまで掘り進みますが、この遺跡は十分なかたちで調査され保存されるということはなく、出入口はコンクリートで封印の上、この遺跡の上は盛り土をされてしまいます（写真省略）。

ご存じのように、一九六一年の夏にはベルリンを東西に分ける壁が作られます。その壁がちょうどこの地下壕の近くに作られ、壁の周辺には鉄条網が張られたため、この地下壕には全く手が着けられない状態になります。

しかし東ベルリンでは、一九七〇年から一九七三年にかけて西側に通ずる地下道が発見されます。ベルリンの地下には防空地下壕など様々な地下壕があるわけですけれども、そこを通って西側に脱出する人たちがいました。それを阻止するために東ドイツの国家保安局 Stasi.（Staatssicherheitsdienst の略称）が東ベルリン全体の地下壕の調査を開始します。そして防空地下壕や総統地下壕を再度発掘するわけです。それによって官邸地下壕と総統地下壕をまた掘り出すことになります。これがその時に撮られた写真です（写真2参照）。しかし、この地下壕は調査の末、埋め戻しされることになります。

写真３　©Berliner Unterwelten e. V.

総統地下壕はブランデンブルク門の近くの、ちょうどウンター・デン・リンデンを横切るヴィルヘルム・シュトラーセの官庁街にあります。この通りは東独時代にはオットー・グローテヴォール・シュトラーセ（グローテヴォールとは東独建国期の指導者の一人）と呼ばれていましたが、一九八六年から八八年にかけてこの地下壕の近隣に集合住宅が建設されます。建設に着手したものの、六、七メートル掘っていったところで地下壕とぶつかってしまいました。建設を進めるために、総統地下壕のコンクリートの覆いの部分をかなり大変な作業を通して破壊することになります。その結果、地下壕の全容が姿を現すわけですけれども（写真３参照）、地下壕が三・五から四メートルもの分厚い防護壁に囲まれ、その解体には費用が嵩むため手を付けることができず、そのまま砂利で埋め戻しました。その状態が今日まで続いていますが、ご覧のように、現在、地下壕の上は駐車場となっています（写真４参照）。総統地下壕は、東西ベルリンの境にあって、東西対立のもと十分な調査がなされず、また統一後はとりわけネオナチなどの問題もあり、発掘ならびに調査をめぐる状況は簡単ではなかったと思われます。しかし、ワールドカップが開催された二〇〇六年になってようやくこの総統地下壕の存在を記す掲示板が設置されました。それがこの写真であります（写真４参照）。こうしてベルリンの地下壕の現状は、今に至るも駐車場のままの状態です。掘り出せばおそらくネオナチの聖地にされかねませんので、せいぜいこの位までしかできないのだろうと思います。現在「ベルリン地下世界」などの団体がベルリンの地下壕を中心とする戦争遺跡の調査や紹介等を行い、それを

写真 4　©Berliner Unterwelten e. V.

歴史教育や様々な展示等に使っていますが、クロイツベルクの防空壕やフリーゼン・シュトラーセの防空施設等々をも含めベルリンの戦争遺跡の全体像の把握というのはこれからの課題であろうと思います。

戦争の遺跡をどう保存するかは、この総統地下壕に限ってみても戦後の東西対立の歴史に翻弄され十分な調査が行われてこなかったように、つねにその時代の政治状況に左右されがちです。戦争を体験した世代が亡くなってゆくなかで、戦争の記憶や記録をどう伝えてゆくかについて問われている現在、被害・加害の両方の歴史を含め、戦争遺跡の保存の在り様も、やはり真剣に考えられなければならない重要なテーマであります。以上、ごく簡単でありますけれども、官邸地下壕および総統地下壕の紹介を致しました。ご静聴ありがとうございました。

付記

本稿は三田史学会大会でのコメントをもとに作成したものである。本稿作成に際しては、大会当日に用いた地下壕写真のうち版権の所在が不明なものや不確実なものについては掲載しなかった。また本稿を仕上げるにあたって、総統地下壕に関する写真の掲載を快諾して下さった「社団法人ベルリン地下世界」会長ディトマー・アルノルド氏、およびドイツ連邦文書館のオ

リヴァー・ザンダー博士により感謝申し上げる。（Herrn Dietmar Arnold von Berliner Unterwelten e. V. sowie Herrn Dr. Oliver Sander vom Bundesarchiv Koblenz ist der Verfasser für die jeweils freundliche Genehmigung zur Benutzung der Fotos zu Dank verpflichtet.）